

<教育活動事例> ルース駐日大使講演の学生による 同時通訳：その準備と実践、および今後の課題

著者名(日)	柴原 智幸
雑誌名	国際社会研究
巻	2
ページ	205-216
発行年	2011-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000556/

教育活動事例

ルース駐日大使講演の学生による同時通訳 －その準備と実践、および今後の課題－

柴原 智幸*

Educational Activities

Simultaneous Interpretation of the American Ambassador

John V. Roos

Preparation and the Future Tasks

SHIBAHARA Tomoyuki

1. はじめに

2011年5月9日、アメリカのルース駐日大使が神田外語大学において講演を行った。この際、本学通訳翻訳課程の最上級生である3年生7人が同時通訳を担当した。本稿ではその準備と実際の通訳について、さらに今後の課題について述べる。

* 神田外語大学英米語学科専任講師、通訳翻課程コーディネーター。 Translation and Interpretation course coordinator, Assistant Professor, Department of English, Kanda University of International Studies

2. 通訳の準備について

2-1 通訳実践の目的について

今回の通訳について打診があったのは旧年度中である3月ごろであった。ルース駐日大使が本学で講演をすること、講演の原稿を事前に入手することが可能であることなどの条件から、通訳翻訳課程の学生でも同時通訳(原稿が事前入手できるという意味では、厳密な意味の同時通訳ではないが、それにきわめて近いもの)が出来ると判断した。

今回の通訳の目的は、初年度から指導してきた総合的学習としての通訳の実践である。

通訳翻訳課程においては、通訳・翻訳には単に「英語力」だけでなく、「日本語力」や「背景知識」の必要性などが必要なことを強調してきている。

通訳をすることを通してその3要素の再確認を行い、反省点を洗い出し、更なる学習に結びつけることが最終的な狙いであった。

また、実際に通訳を行なわない2年生、1年生に関しても、2年生は3年生の訳出を聞かせ、1年生は講演そのものを英語で聞かせることにより、学びと気づきを促すことを目的とした。

講演の通訳を通じた学習効果を見るため、通訳に参加した学生7名だけではなく、訳出を聞いた学生を含む通訳翻訳課程在籍生全員に感想文を課した。

2-2 通訳内容の準備について

いきなり完全な同時通訳は難しいと考え、事前に講演の原稿が入手できる今回の機会を非常に理想的な環境と判断して通訳の実施に踏み切ったのだが、その後ルース大使から講演の原稿は届かないまま、4月半ばの大使館との話し合いを迎えることになる。

その際に明らかになったのは、

- ・大使が講演形式で一方向的に学生に語り掛けるのは、講演時間の最初の 10 分から 15 分
- ・メインは質疑応答
- ・質問はツイッターでも、講演会の数日前から募集するという形式であった。

講演会冒頭の部分の原稿だけでも入手できるかと大使館側に確認したところ「大使は会場の人々とのやり取りから即興的に話すやり方を好まれるので、おそらく原稿は提供できないと思う」との返答であった。

また、ツイッターで質問を受けると非常に多くの質問が集まることが予想され、通訳を行う上ではその対処も重要だと予想された。パワーポイントなどで表示された質問に対して答えるようなやり方の場合、同時通訳が間に合わなくなる恐れがあるためである。

質問に関してはどの質問に答えるかを事前に決定するという大使館側のコメントを受け、事前に質問一覧を見られるのであれば見せていただきたいと要請したが、これに関して返答はなかった。

通訳翻訳課程としては、講演を同時通訳するにあたり、3 月中旬から詳しい情報収集にあたっていたが、講演の大まかなテーマが判明した程度で具体的な内容は明らかにならなかった。4 月に入った時点で、

- ・大使の経歴
- ・講演のテーマである日米協力、留学、教育などについて

といった情報について、3 年生各自が収集に入り、その過程で入手した資料や情報（他の授業で入手したものを含む）を共有して理解を深めた。また、Youtube などにあるルース大使の動画などにも極力目を通し、シャドウイングなどを通して大使の語り口に慣れることができるよう準備を行った。また、各自で大使の動画を使い逐次通訳、同時通訳の練習もするよう指示した。

通訳翻訳課程では、毎週土曜日に勉強会を行っているが、講演直前の勉強

会では Youtube にアップされていたルース大使の映像(東日本大震災の被災地視察直後のコメント)を使用して逐次通訳および同時通訳の練習を行った。

参加者は3年生3人、1年生3人である。

まず大使の発言をおよそ30秒ごとに区切って逐次通訳をさせ、指導に当たる筆者からコメントを加えた。コメントの内容は、主に通訳内容の妥当性、訳語の選び方、背景知識の確認の3点である。

その後同時通訳の練習に移り、3分ほどの動画を順番に同時通訳させた後にコメントを加えた。コメントの内容は、必ず伝えなければならないメッセージをつかみ取ること、理解が不完全な場合には沈黙する勇気を持つこと、いったん話し出した文は最後まで完結させることの3点である。

学生はそれまでも個人的に通訳の準備を進めていたが、人前での通訳練習というプレッシャーがかかる環境になると勝手が違い、本番に備えて良い準備になったようであった。

2-3 通訳環境の準備について

4月半ばに音声機器などを管轄する大学の部署とも話し合いを持ち、当日の配線などについて打ち合わせを行った。

通訳を行う場所に関しては、講演の3週間ほど前まで決まらなかったが、最終的に講演が行われる大教室の音声調整室を使用することになった。

もともと「音声調整室」とはいうものの、実際には様々な機器の倉庫として使われていた小部屋であり、当日は機器を運び出して通訳する場所を確保することになった。

懸念されたのはパワーポイントが映し出されるスクリーンを側面から見る位置にあるため、スクリーンの情報が読み取れないことであったが、事前にチェックしたところ何とか情報が読み取れることが確認できた。

同時通訳には簡易同時通訳装置(パナガイド)を使用し、訳出は会場入りす

る通訳翻訳課程 2 年生が聞いて、パフォーマンスに関してコメントすることにした。簡易同時通訳装置の送信機(通訳者の訳出を送信する)は 2 台あったため、そのうち 1 台を筆者が使って訳出し、もう 1 台を学生が順番に(大使の冒頭の話は 3 分程度で交代、質疑応答は質問と答えごとに交代する)使用して訳出することになった。

受信機は 22 台あったが、そのうち 2 台は通訳の録音用に使用し、18 台を 2 年生用に使用(実際には事故で 1 名が欠席)、予備に 1 台を確保した。なお通訳の切り替え(筆者の訳出を聞くか、学生の訳出を聞くか)は、受信機にあるチャンネル切り替えスイッチで簡単に行うことができる。

一番の問題は会場の音声をどう通訳者に届けるかである。大使だけではなく、会場の学生から質問を募るため、複数のマイクからの音声が明瞭に通訳者のヘッドホンに届かなくてはならない。

これに関しては、会場のマイクすべての音声を一本化し、それを有線で通訳者のいる音声調整室に届けることで解決した。

また、音声調整室は非常に狭く、空調も十分ではない状態で筆者と学生 7 名の合計 8 名が詰めることになる。このため、室温があがりすぎた際には廊下へのドアを解放し、手すきの通訳要員が周囲の静寂を確保することになった。

また、大使館に口頭で録音の許可を取ったうえで、会場の音声と通訳者の訳出(送信機ごと)を録音し、後に通訳の分析に使用することにした。

講演当日には、通訳にあたる 3 年生が履修している授業が 1 限にあったため、実際に会場入りして簡易同時通訳装置が使えることなどのチェックを行った。

3. 通訳の実践について

3-1 当日の通訳の流れについて

簡易同時通訳装置はCALL教室にあり、通常の授業でも使用するため事前に運び出すことは出来ない。このため講演の直前に搬出を行なおうとCALL教室に向かったところ、直前の授業が休み時間に入っても続いていたため、教員に許可を取って搬出することになった。

通訳担当の3年生は3限の授業が終了してから集合することになっていたが、会場で訳出を聞く2年生に簡易同時通訳装置を手渡さなければならず、さらにセキュリティーの関係で受講カードの記入や入場者の名簿の作成などもしなければならなかったため、予想を超えて時間がかかった。

通訳室となった音声調整室に入った後は、会場の2年生と協力して簡易同時通訳装置の作動チェックおよび録音の準備を行ったが、会場からの音声の調整(大きく聞こえすぎた)や細かい配線などに手間取り、音が聞こえることは確認したものの、訳出の音量までは確認・調整ができなかった。

なお、会場に空調を入れると音声調整室にも空調が入ることが判明し、室温の上昇により通訳に支障が出ることはない判断した。

懸案のツイッターによる質問だが、直前まで10問足らずしか質問が集まっておらず、通訳するうえでは支障がなかった。また、会場からの質問に関しても、質問の準備をしていた学生から、当日の午前中に質問内容について情報を入手して準備することができた。

ルース大使が言葉を選びながらゆっくり話したこと、背景知識などの準備をしてあったこと、直前に予行演習として大使の動画を使った通訳練習を行なっていたことなどの要因もあり、実際の通訳そのものは非常に順調に進んだ。

通訳担当の学生は、初めての同時通訳にも臆するところがなかった。通訳

の順番が回ってくるまでが待ちきれず、通訳開始後 45 分ほど経過した時点で、筆者が使っていた送信機も使って通訳をさせてほしいと申し出たほどである。筆者もちろん送信機を譲ってオブザーバーに回った。

途中、通訳室の外の廊下が騒がしくなり、手すきの通訳要員が室外に出て静寂を呼び掛けることはあったが、その他はおおむね問題なく通訳が終了した。

ただ、学生向けに易しく話していた大使とは違い、最後の赤沢前学長の答礼スピーチは非常に格調の高い語り口で、訳出にはかなり苦勞していたようである。

3-2 通訳を担当した学生、訳出を聞いた学生の感想

通訳を担当した 3 年生、および会場で訳出を聞いていた 2 年生(別会場で講演を聞いた 1 年生 1 名含む)が書いた感想文から、通訳や総合的学びに関する気づきが含まれる部分を以下に抜粋する。

・3 年生 O 君

大使の話す内容はわかるが、当てはまる日本語がぱっと出てこなかったり、口が付いてこなかったり、同時通訳の難しさを感じた。また一度崩れるとずるずると後に引きずってしまうことや、自信がないと声のトーンが下がる自分の課題も見つかった。

・3 年生 N 君

ルース大使の話し方、話すスピードは事前に動画で確認していた。学生向けということもあってか、わりとゆっくりと話していたので、だいたいことは聴き取れていたと思う。しかし少し独特な言い回し、表現をしているように感じ、なかなか日本語に訳すのが難しかった。

英語の意味は頭で理解をしていますが、それを日本語に瞬時に訳すのがいかに難しいかを肌で感じた。予備知識があれば知識で乗り越えられる部分も多くあるだろうと通訳しながら感じ、やはり通訳において知識というのは非常に重要だと再認識した。

・3年Oさん

自分の駄目だった点として、自分が話している日本語にまで注意が払えなかったこと、話を線ではなく点で捉えていたことが挙げられる。黙らないで何か言わなければという気持ちが強く、同時に次の英語を聞かなければ次が訳せない!という思いもあり、全体の話をつまみ食いして唯一聞こえた細かい所(単語など)をとりあえず話していたため、まとまりがない文になってしまい、また途中で結局何が言いたかったのだろうか?と分からなくなってそこで止まってしまったことがほとんどだった。自分のことで精いっぱい聞き手を意識できる段階ではなかった。

事前準備不足・知識不足もあった。自分が少しでも分かっている所では、英語が聞き取れなくても大体こう言っているのかなというような予想がついたが、知らない事柄について話していたときは、ただただ何を話しているのだろうと聞くことに必死で訳すどころではなかった。

日本語力も十分ではなかった。唯一聞き取れた所を訳そうと思っても瞬時に適切な日本語表現を用いて訳すことが出来ず、時間が過ぎてしまった。

・3年Kさん

講演会の前に「ある程度内容を把握してから訳出する方がいい」というアドバイスを頂き、焦って訳出する必要はないと安心していましたが、実際には理解したものを整理してアウトプットをしながら次の情報を聞き取ることが想像以上に難しく、どうしてもリスニングかアウトプットのどちらかに意識が偏

ってしまった。逐次通訳と同時通訳では頭の使い方がだいぶ異なると感じた。背景知識の大切さもよく分かった。限られた時間の中で訳出をしなければならぬ同時通訳では、オリジナルのメッセージをスムーズに理解することはとても重要である。今回は大体のテーマが決まっていたため、ある程度背景知識をつけてから通訳に臨むことができたので、「トモダチ作戦」のような背景知識のある部分は他よりも余裕をもって理解することができた。また、一部を聞き落した時に訳出が原文の意から大幅にそれないようにするためにも背景知識は大切だと実感した。

同通ブースに入ってから機械を通じた通訳であっても、自分の通訳が誰かに聞かれると思うといつも以上に緊張してしまった。オーディエンスを意識しすぎて崩れるのであれば、慣れるまではあまり意識しないというのも1つの手かもしれない。

・3年生 T 君

自分なりに気をつけようと思ったことは聞き手と語り手を意識すること＋文は必ず言い切ることだった。しかし本番では聞き取れたことを言うのに精一杯で聞き手は意識できず、ルース大使が伝えたいことをくみ取って口調を変えるなど工夫も教わったのに実行できず、しまいには言い切れないところもあり、悔しかった。それ以上に「日本語力の無さ」が悔しかった。ルース大使はゆっくり話してくれる＋事前の対策で、自分なりにピンときたところもあったのに、それを表現するための言葉が出てこなかった。事前の勉強会で得た背景知識は確かに力になったが、自分にはそれを表現する力もなかったのだと通訳中に改めて気づいた。

・2年生 Sa さん

自分の頭の中で同時通訳を試みたが、日本語が出てこなかった。頭の中で分

かってもそれを発信しなければならず、そのツールである日本語をだすことがなんと難しいことか。またただ日本語をだすだけでなく、補足的な説明(知識など)も上手く入れていかなければならないので、日頃からいろいろなことにアンテナをはる大切さも良く分かった。

・2年生 Shi さん

今回の講演では、大使の話の内容をできる限り聞き取って、大体的内容を要約しながら聞き進めようと決めていただけに、自分のリスニング力の無さをはっきりとわかった。理解したつもりになっていざ何か書こうとしてもペンが動かなかった。

・2年生 M さん

知らない単語がたくさん出てくる、日本語で表現が上手にできないなど、うまく通訳できなかつた。これはどのように表現したらいいのだろうか悩んでいると、イヤホンから先輩や柴原先生の訳出(自分では出せないような表現)が聞こえてきて、それに圧倒されるばかりだった。

講演会を通して自分の知識の無さ、日本語力と英語力の無さを改めて感じた。

・2年生 T さん

自分たちが友達同士で英会話をしているときには、出てくる英単語は自分達の守備範囲を超えることはほとんどないが、講演会などでは予測していない言葉がたくさん出てくる。通訳では聞いて瞬時に日本語を口から出すことが必要なので、言葉を"知っている"というだけでは足りない。通訳の練習回数を重ねていく必要があると思った。スポーツをやるときに毎日練習していても練習試合の回数を重ねないと本番でなかなか勝てないのと似ているような気がする。

・1年生 K さん

下調べが足りなかったと思い知らされた。今後誰かのスピーチを聞くときには、発言だけでなくその人の背景なども深く把握しておくべきだと考えた。

3-3 学生の感想の分析

全体的な傾向として、3年生は背景知識と具体的なデリバリー(訳出の際の語り口)の重要性に言及しているのに対し、2年生は自分の日本語力の不足に気付くことが多かったようだ。

これは、1年生の間はまず英語力を伸ばすことに意識が向きがちなことと関係していると思われる。

「英語力」「日本語力」「背景知識」という3つの要素は、1年生のころからしっかり認識して学習に取り組むべきであるが、実際問題として学年ごとに別々の要素にある程度集中させる必要があるかもしれない。

ただ、「背景知識」に関しては学年を問わず学ぶことができるため、この点に関しては通訳翻訳課程の履修開始当初から、特に強調しておく必要があると思われる。

4. 今後の課題について

4-1 通訳を通した学びの達成度について

学生の感想文から読み取る限り「総合的学習としての通訳の実践」、「英語力・日本語力・背景知識の大切さの再確認」、「反省点の洗い出しと今後の学習目標の設定」など、今回の通訳を通した学びの狙いは、ほぼ達成されたとみて良いと考えられる。

4-2 今後の具体的課題と展望

しかし、今回の通訳は、いくつかの課題も残した。以下に列挙する。

- ・ 講演者との情報交換が十分でなく、結果的に準備不足のまま通訳を行った
- ・ 講演者と講演内容について、課程全体として掘り下げて調べきれなかった
- ・ 通訳の練習に十分時間をかけられなかった
- ・ 会場の設営などに関し、事前に十分検証・調整ができなかった
- ・ 録音レベルの調整に失敗し、訳出の録音が非常に聞きづらいものとなった

今後は上記の点に留意し、極力早めに動いて講演者と情報を共有し、課程全体を巻き込んだ学習と通訳練習を行ない、訳出をきちんと記録に残したい。

また、将来的にはビデオ会議システムを導入し、今回のような講演の通訳に加え、多言語との英語をキー言語にしたリレー通訳、他大学との合同通訳演習などにつなげて行きたいと考えている。